



Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

セム系部族社会の形成



文部省科学研究費補助金
「特定領域研究」
Newsletter No. 1

2005年9月号



目 次

総合的研究手法による西アジア考古学	大沼克彦	1
西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係.....	佐藤宏之	3
西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成	西秋良宏	5
セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究	藤井純夫	6
西アジアにおける都市化過程の研究	常木 晃	7
北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究.....	沼本宏俊	9
「シュメール文字文明」の成立と展開	前川和也	11
パレスチナにおける都市の発達と「セム」系民族の展開	月本昭男	13
環境地質学、環境化学、 ¹⁴ C年代測定にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史	星野光雄	15
ユーフラテス河中流域とその周辺地域の住民に見られる形質の時代的变化.....	石田英実	17
西アジア先史時代から都市文明社会への生産基盤の変化に関する動物・植物考古学的研究	本郷一美	18
古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究	岡田保良	20
西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究:衛星画像解析による探査法.....	松本 健	22
オアシス都市パルミラにおけるビシュリ山系セム系部族文化の基層構造と再編	宮下佐江子	24

文部科学省科学研究費補助金 平成17年度発足特定領域研究

「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域 ビシュリ山系の総合研究」の開始にあたって

領域代表者 大沼克彦

総括班「総合的研究手法による西アジア考古学」研究代表者
(国士舘大学イラク古代文化研究所教授)

領域の概要

大学や研究機関など多くの邦人調査団が1956年以来西アジア地方でおこなってきた考古学研究は、日本的な繊細さと客観性により世界的に高い評価を受けてきた。しかし同時に、邦人による研究が複数研究分野の連携に基づく総合的研究であったとは言い難いことも否定できない。そこで、これまで邦人調査団が蓄積してきた研究成果と個別性を踏まえつつも個別の枠にとらわれない、総合的な研究として本領域を計画した。

アッシリアやバビロンなど、西アジア古代王国の創建集団といわれるセム系民族の一大原郷・シリア国北東部ユーフラテス河中流域ビシュリ山系で総合調査をおこなう本領域は、自然、人文両科学の多彩な分野の融合的な連携を通して、同地の自然と文化の変遷、即ち、自然環境、集落様式、食性・生業、人間形質、建築様式、美術様式、社会関係などの変遷を解明する。そのうえで、同地の先史社会が定住社会を経て古代都市文明社会へと発展した経緯と、定住社会の出現とどのように関係しながらセム系部族社会が形成されたかを解明する。

領域の内容

現地研究と国内・国外研究で構成される本領域は、本来ならば北西イラクでの関連調査を必要とする。しかし、イラクにおける今日の極めて危険な政治状況は本研究期間の5年(平成17年度～21年度)以内に終息するとは考え難く、イラクの現地研究は本領域から除外する。

現地研究の進行は先ず、遺跡の分布調査を実施する(第1年次)。この分布調査で遺跡の年代と分布状況が明らかになる。次に、分布調査の成果に基づいて本領域の全体課題に合う遺跡を選択し、発掘調査を実施する(第2～4年次)。発掘調査には、遺物、遺構、動物骨、土壌、地形・地質などを分析する自然科学的研究班も合流する。最終年度には、発掘調査の成果を踏まえた総括的な研究と補足的な調査を現地で実施する(第5年次)。

研究の組織

- 以上の内容を有する本領域は、以下に述べる総括班と13の計画研究班で構成される(内は研究代表者)
- 総括班：総合的研究手法による西アジア考古学(大沼克彦：国土館大学イラク古代文化研究所教授)
- 計画研究：西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係(佐藤宏之：東京大学大学院人文社会系研究科助教授)
- 計画研究：西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成(西秋良宏：東京大学総合研究博物館助教授)
- 計画研究：セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究(藤井純夫：金沢大学文学部教授)
- 計画研究：西アジアにおける都市化過程の研究(常木晃：筑波大学大学院人文社会科学研究科教授)
- 計画研究：北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究(沼本宏俊：国土館大学体育学部助教授)
- 計画研究：「シュメール文字文明」の成立と展開(前川和也：国土館大学イラク古代文化研究所共同研究員)
- 計画研究：パレスチナにおける都市の発達とセム系民族の展開(月本昭男：立教大学文学部教授)
- 計画研究：環境地質学、環境化学、¹⁴C年代測定にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史(星野光雄：名古屋大学大学院環境学研究科教授)
- 計画研究：ユーフラテス河中流域とその周辺地域の住民に見られる形質の時代的变化(石田英実：滋賀県立大学人間看護学部教授)
- 計画研究：西アジア先史時代から都市文明社会への生産基盤の変化に関する動物・植物考古学的研究(本郷一美：京都大学霊長類研究所助手)
- 計画研究：古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究(岡田保良：国土館大学イラク古代文化研究所教授)
- 計画研究：オアシス都市パルミラにおけるビシユル山系セム系部族文化の基層構造と再編(宮下佐江子(財)古代オリエント博物館研究部研究員)
- 計画研究：西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究：衛星画像解析による探査法(松本健：国土館大学イラク古代文化研究所教授)

期待される成果

本領域は発掘調査を通して特定地域・時代の歴史を再現する伝統的な考古学とは異なって、遊牧部族社会の流入と離脱を不断に繰り返してきた西アジア都市の歴史的特性を通時的に解き明かし、「セム系部族社会」が形成された経緯を明らかにする。このように、古代文明でもイスラムでもない、その両者を貫く「部族性」をキーワードとして西アジアの歴史と社会を解明する本領域は、考古学でもなく現代学でもない新たな学問領域を創成する。

今日の世界は暴力連鎖のただ中にあり、その一大要因としてセム系部族社会の存在が考えられている。考古学、文献史学、文化史学に立脚してセム系部族社会を総合的に研究する本領域は、これまで注目されることの少なかった「セム系部族社会」に関する重要な学術的情報を提供するものと期待される。

総括班の役割

総括班は本領域研究の全体的な進行を調整し、統括する。そのために、全体会議(17年度2回、18～21年度各4回)、公開シンポジウム(17～20年度各1回、21年度2回)、研究発表会を定期的開催する。また、進行過程にある研究の妥当性を検証するため、研究開始の2年後と研究の完遂後に外部評価を実施する。国内外の関連学界との研究協力に関する事項も総括班が担当する。さらに、ホーム・ページの活用、ニュース・レターの定期的出版(17年度2回、18～21年度各4回)、年次報告書と最終報告書の刊行などを通して、研究成果を社会に積極的に還元する。

計画研究

「西アジア旧石器時代の行動進化と 定住化プロセスの関係」

研究代表者 佐藤宏之 (東京大学大学院人文社会系研究科助教授)

現代人ホモ・サピエンスは、4万年前以降氷期の温帯地域を中心に、石刃技法等を保持しながら広域移動型行動戦略を駆使して、草原等の中大型獣狩猟を発達させたが、後期旧石器時代後半期になると、資源構造の変化に伴い、次第に各地の動植物資源に代表される地域生態に多面的に適合した地域社会・文化の形成に向かうようになったとおおむね見なすことができる。この時、最初の部族社会の初現形態が誕生した可能性が高い。

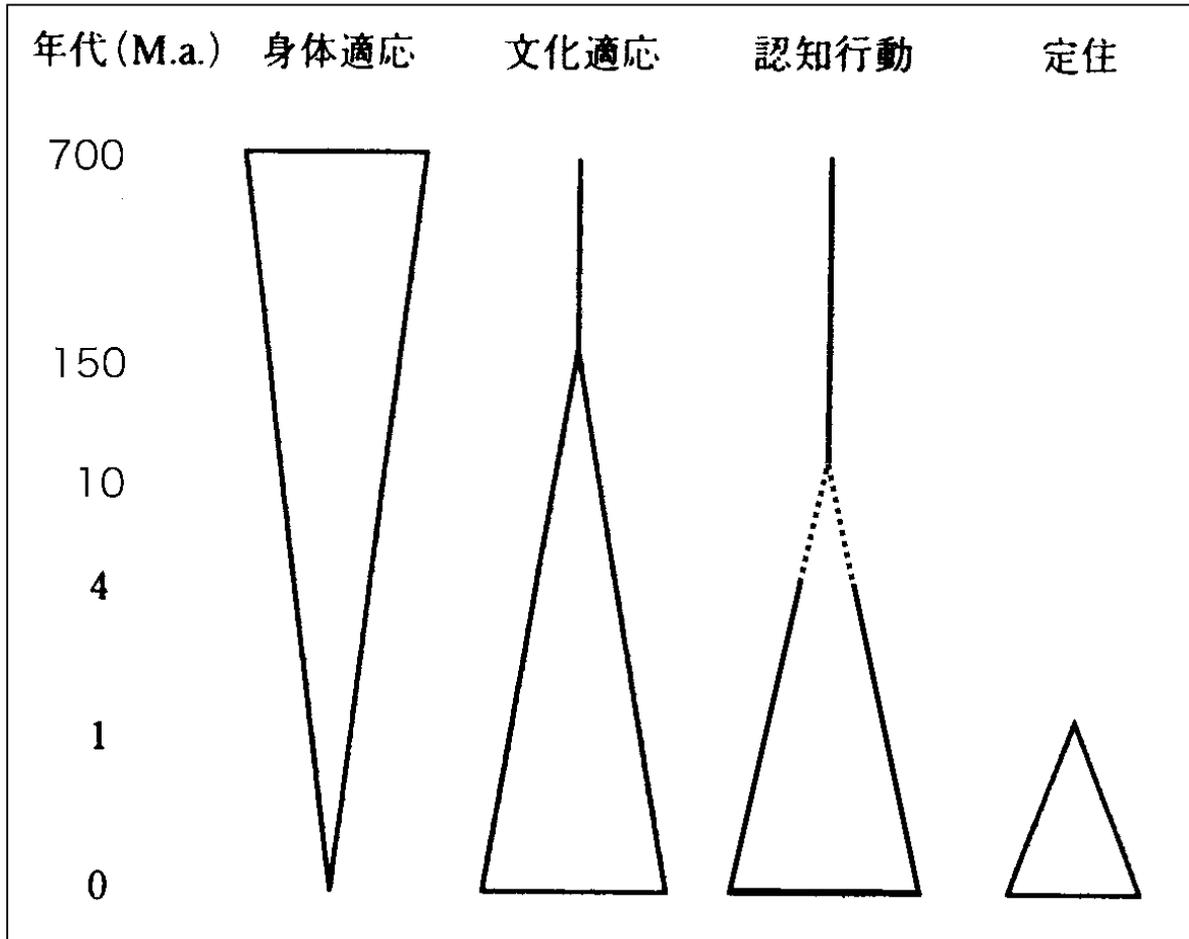
本計画研究班は、現代人の行動進化というすぐれて今日的な視点から、西アジアを中心とする地域の定住化プロセスの中に、部族社会の初現と形成過程を探ることを目的としている。

西アジアにおける定住化のプロセスは、コムギ等の植物資源の管理・栽培と、ヒツジ等の動物資源の馴化・家畜化という生業システムの本格的採用に連動した過程であったと考えられるが、近年の研究により、その形成は、かつて「新石器革命」と呼ばれていたような短期間で達成されたものではなく、後期旧石器時代初頭に遡る長期にわたる適応過程の歴史を有していることが明らかにされた。現代人が誕生の地アフリカを脱して最初に拡散を果たした地域である西アジアの後期旧石器時代の集団は、遊動型先史狩猟採集民であったと考えられるが、西アジアという気候環境に適応した多様な狩猟採集戦略の展開過程の中で、いち早く植物資源の管理と半栽培、動物資源の馴化技術を獲得し、長期にわたる試行錯誤を繰り返しながら、農耕・牧畜を主体とした定住的生業=社会システムに移行したと考えられる。

しかしながら、この一般的なシナリオは、西アジア各地の個別研究事例を相互に組み合わせで構築された仮説であり、十分な検証を受けていない。そこで、本研究では、近年世界の他地域で組み立てられつつある稲作農耕や階層化狩猟採集民社会等の定住化過程論との比較考古学的・民族考古学的検討を行い、西アジア定住化仮説の理論的妥当性について検討することを第一の目標としている。また、理論的検討と並行して、西アジアにおいて最初に定住化が進行した核地帯のひとつであり、本研究領域の共通調査フィールドであるシリア・ビシュリ山系一帯において、どのように後期旧石器適応が進行したか、あるいはどのような定住化のプロセスが生じたのかを分析し、具体的な地域相に関する検討も行いたい。

後期旧石器適応とは、現代人による環境の社会化のプロセスであり、生業・技術・社会関係・文化様式等が相互に密接に関連しながら行われる行動進化と考えられることから、諸要素の具体的分析とともに、その相関関係を具体的に解きほぐすことが重要となる。西アジアの定住社会研究は、

欧米を中心に長い研究史をもつが、同時にその視点もまた、欧米的な自民族起源探求の文明論に偏りがちであった。非欧米の視点から照射することにより、欧米中心史観(文明史観)を脱した人類史的评价を与えてみたい。



計画研究

「西アジア乾燥地帯への 食料生産経済波及プロセスと集団形成」

研究代表者 西秋良宏（東京大学総合研究博物館助教授）

西アジアは多くの地域が乾燥地に分類されるが、ここでいう乾燥地とは雨水のみによるムギ作農耕が安定的に実施できない、あるいはそれが不可能なほど降雨量が少ない地域のことである。いわゆる肥沃な三日月地帯の南側に広がる地域である。本特定研究が焦点をあてるシリア内陸部ビシュリ山系はそこに含まれる。

西アジアは世界で最初に食料生産経済を発展させた地域である。これまでの研究は、その起源（一次的新石器化）の追求に偏向してきた。したがって、現地調査も雨量豊富な地中海東岸地域やユーフラテス川上流など起源地と目される地域に集中している。これに対し本研究班が扱うのは、食料生産経済成立後に新石器人たちがどのようにして周辺地域の開発に乗り出していったか、逆に周辺地域の住人がいかに食糧生産経済にコミットしていくようになったかという二次的新石器化過程の解明である。ビシュリ山系をフィールドとして、この課題に取り組みたい。

乾燥地帯を食糧生産民が恒常的に開発するには、灌漑農耕や家畜遊牧など一層の技術発展、それらと狩猟採集との組み合わせなど独特な生業戦略が必要であったと考えられる。一方、オアシスを除けば資源総量も乏しく人口密度が希薄な地域であるから、そこに定着するには対内的、さらには天水農耕民をふくむ緒集団との対外的紐帯確立など社会戦略の工夫も求められたであろう。本研究は生業技術の発展だけでなく、社会関係にも視野を広げて乾燥地の新石器化を考察する点に特徴がある。

内陸乾燥地への食糧生産民の最初期の進出様態が特に関心をひくのは、それが、灌漑なくして農耕不可能な南メソポタミアへの進出を準備した可能性がある点である。また、後代の粘土板文書に



しばしば言及されるような部族的集団が形成される起点となった可能性もある。その研究は、西アジアに固有な文明形態、部族社会が確立したプロセスの原点を論じることに貢献すると考える。

シリア内陸部、ビシュリ山麓オアシスに
点在する農耕村落遺跡

計画研究

「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」

研究代表者 藤井純夫（金沢大学文学部教授）

セム系部族社会の形成過程を解く鍵は、新石器時代の後半から青銅器時代にかけて成立した初期遊牧文化にある。このことは、よく知られている。しかし、この分野の研究はきわめて低調で、遺跡調査すら満足に行われていない。理由は二つ。第一に、集落を形成する農耕民とは異なり、遊動生活を送る初期遊牧民の遺跡を確認することは、容易でないからである。第二に、遺跡がうまく確認できたとしても、沙漠の中での調査には様々な困難が伴うからである。そのため、セム系部族社会の原点とも言うべき先史遊牧文化（特に前・中青銅器時代の遊牧文化）の具体的な内容は今もって明らかになっておらず、定住都市・農村社会の側からの間接的な言及だけがほとんど唯一の手掛かりとなっているのである。この状況を打破しない限り、セム系部族社会の形成過程を解明することは困難であろう。

そこで本研究班が着目するのが、彼らの墓制である。集落を形成しない遊牧民も、墓だけは造る。しかも、かなりしっかりした石積みの墓を造る。この墓から、マルトゥ（Martu）やアムツル（Amurru）たちの足跡を辿ることはできないだろうか。幸いなことに、ステップ・沙漠地帯に点在する初期遊牧民のケルン墓は部族単位で造営されているので、遊牧部族社会の形成過程を追跡するには格好の手掛かりとなる。問題があるとすれば、遊牧民の墓1件の持つ情報量の少なさであろう。遊牧民の墓では副葬品や埋葬遺体が出土しないことが多いので、年代決定すらままならない。こうした難点を補うためには、複数のフィールドを横断する包括的な比較研究が必要であろう。

本研究班の目標は、1)西アジア各地における先史遊牧部族社会の墓制変遷を追跡し、2)これを基に、セム系部族社会の形成過程を明らかにすること、にある。対象となるフィールドは、バーディアト・シャーム（広義のシリア沙漠）の南北両端である。北端とは、つまり、シリア北東部のビシュリ山系。南端



とは、この場合、ヨルダン南部のジャフル盆地を指す。この二つの地域の調査を機軸に、その周辺地域（サウジアラビア北部、シナイ半島、オマーンなど）の踏査も、可能な限り実施したい。

沙漠に埋もれているマルトゥたちの足跡を具体的に捉えること――それが、本研究班の究極の課題である。

タラアト・アビーダ第106号墓、ヨルダン南部ジャフル盆地（2004年夏、筆者撮影）

「西アジアにおける都市化過程の研究」

研究代表者 常木 晃（筑波大学大学院人文社会科学研究科教授）

現在、都市の起源として欧米の学界で広く認められているのは、紀元前3,500年頃のメソポタミア・ウルク期の都市遺跡群である。都市の出現は人間社会のあり方を根本的に変え、これ以降人類の歴史は都市を中心に回っていくことになる。現代でも、都市は政治・経済・文化の発信基地となっており、世界の中心は都市にあるといっても過言ではない。なぜ都市が歴史上に登場してきたのだろうか。この人類史の一大画期をめぐるのは、これまでにさまざまな仮説が提示され、論議されてきた。環境変化や資源の偏在、戦争、交易など様々な要因が取り上げられてきたが、いまだ十分な回答が得られていないのが現状である。

私たちは、その大きな原因は、メソポタミアにおける都市の発生を農耕社会の発展という視点からしか捉えてこなかったことにあるのではないかと考えている。現代のアラブ社会を見ても、二律背反的な世界が実はひとつの社会を形成し、歴史を動かしていることがわかる。都市と砂漠というまったく異なる環境に生きる都市民と遊牧民が、様々な部族社会的ネットワークで結節され、互いに離反集合を繰り返しながら統合的な社会を形成しているのである。これまで都市形成を主題として西アジアでおこなわれた地域研究はかなりの数に上るが、そのほとんどは踏査によって各時期の定住集落のセトルメント・パターンを把握し、その変遷データから都市形成に迫ろうとするものであった。こうした手法では、遊牧社会のような遊動的社会の存在を把握することはできないし、部族社会の形成やその解明についてはほとんど視野にすら入っていなかった。確かに農耕社会の成立は都市形成の前提となっているが、農耕村落から都市に展開していくためには、部族社会の紐帯が大きな鍵を握っていたと考えられる。そこに遊牧民が介在していた可能性は極めて高い。

従来、遊牧社会の成立は農耕社会よりも大きく遅れ、都市成立以後に形成されたとみられてきた。また、遊牧社会の都市へのかかわりも、寄生的なものでしかないと言われてきた。本研究ではこうした従来の視点を180度転換させ、都市形成に当たって遊牧社会に代表される部族社会が大きな役割を果たしたことを明らかにしていきたい。具体的には、農耕集落と遊牧社会の中の部族性を抽出し、部族性をキーワードとして両者の有機的結合の中から都市形成が起こったことを、実際の考古学的、歴史的、言語学的資料から抽出していく。したがって研究分野は、主に考古学分野および文献学分野の2つからなる。考古学的分野では、特にセム系民族の一大原郷地であるビシュリ山系及びその周辺において、遺跡踏査をおこなう必要がある。遊牧民の残した遺跡を探るとともに、GISなどによる各種地理情報を収集して多様な地図を作成し、新石器文化研究領域および遊牧文化研究領域の作成した遺跡分布図や遺構図などをプロットしていく。文献学的分野では、主に青銅器時代前期のビシュリ山系を扱った粘土板文書の中にみら

れる遊牧民関連の記事の抽出とデータベース化を進める。

これらの研究が有機的に結合することにより、これまで十分な回答が得られなかった西アジアの都市形成過程に関して、よりダイナミックで新しい仮説を掲示できるものと確信している。そして、その成果は、これまでの農耕社会を中心とした文明史観を大きく転換させるものになると期待している。



北西シリアにある巨大な新石器時代遺跡テル・エル・ケルクの紀元前6500年頃の集落跡

計画研究

「北メソポタミアにおける アッシリア文明の総合的研究」

研究代表者 沼本宏俊（国士舘大学体育学部助教授）

現在の国際情勢は、イラク戦争、パレスチナ紛争、そして世界各地で頻発する国家紛争や民族紛争により一層混迷を深めているが、こうした紛争の殆どは近現代の列強による帝国主義政策に起因している。その原点は前2千年から1千年紀にかけて北メソポタミア（イラク北部、シリア北東部）で興隆した人類史上初の世界帝国“アッシリア”にあることは疑いなく、この帝国の諸様相の実体が今後の世界の動向を予察し、人類の未来への展望を見出すうえでも非常に重要な役割を担っている。

“アッシリア”は、王を専制君主とした中央集権国家で西アジアの各地に勢力を拡大し属国、属州を従え、全盛期の前7世紀にはオリエント全域を制覇し世界帝国を築くが、この人類史の不滅の偉業を成し遂げたのがビシュリ山系を源郷とするセム系民族である。注目すべきアッシリアの支配政策として被征服民族の強制連行・移住・労働があげられるが、こうした非人道的な政策は近現代の列強や独裁国家の隷属政策と相変わらず、将来、人類が同じ轍を二度と踏まないためにも“アッシリア”を築いたセム系民族の特質を認識しておく必要がある。

こうした視点から本研究では“古代メソポタミア文明”の中でも中核をなすアッシリア文明の解明に焦点をおき、発掘調査や既存出土考古・文字資料の多角的分析を行い新たな知見を提供し、未だ不明瞭なアッシリアの政治、経済、社会構造の全容解明に貢献することを主眼としている。特にアッシリアの帝国化



テル・タバンの遺跡：出土した粘土板文書群

が始まる前2千年紀のアッシリアと近隣諸国の具体的な従属関係や帝国化への発展過程と要因を探り、アッシリア帝国の興亡の背景と人類が最初に築いた帝国主義の実体を究明したい。

本研究はアッシリア史を多角的に究明する総合的研究調査であるが、考古学的研究調査に重点を置いているため研究課題を完遂するには限界があり、都市形成過程、粘土板文書、聖書考古学、建築史、美術史、形質人類等の研究班と連携することにより、セム系民族“アッシリア”の言語、民族、宗教、思想等の実体をより深化させることができ、さらに“アッシリア”の全体像を包括し探求することが可能になる。

本研究では研究遂行の一環としてシリア北東部のハブール川中流域にあるアッシリア時代のテル・タバンの遺跡の継続発掘調査を計画している。同遺跡は国土館大学により1997～1999年、2005年に4回の調査が行われ、様々な新資料が提供されアッシリア史を解明するうえで多大な貢献をなしつつある。特に中期アッシリア時代(前12-11世紀頃)の層位からは、宮殿状建物跡の一部とともに計71点にも及ぶ碑文片や煉瓦片の文字資料や文書保管庫から粘土板文書群を発見し、その記述内容からアッシリア帝国の西方進出の拠点としてアッシリア大王の王子が派遣され繁栄したマリ王国の都“タベトウ”であったことを実証した点は特筆されよう。同遺跡での楔形文字資料の発見は、メソポタミア地方で日本の調査隊による50年におよぶ発掘史の中で、史上初のことである。今後も調査を継続すれば文字資料が出土するのは確実で、本研究は邦人による初のメソポタミア地方に於ける楔形文字使用期の歴史時代の考古学的調査であることを強調しておきたい。歴史考古学的調査ならではの醍醐味は、楔形文字で記された史実を発掘調査によって実証することにつけるが、こうした面でも本研究は国内の考古学及び楔形文字研究者の活性化を促し、今後の西アジア古代史の発展に大いに寄与することができる。これまでの日本の調査隊によるメソポタミア地方の発掘調査は、主に先史時代の遺跡に限られ、楔形文字使用期の歴史考古学の研究領域では欧米諸国に後塵を拝していたが、本研究が契機になり日本がやっと欧米諸国と同じ土俵に立つことができるという点で、非常に意義深いと言える。



テル・タバンの遺跡

計画研究

「シュメール文字文明」の成立と展開

研究代表者 前川和也（国土舘大学イラク古代文化研究所共同研究員）

本研究では、前4千年紀末から2千年紀前半までのメソポタミア地域（現イラクおよびシリア）においてどのようにして粘土板文字記録システムが成立し、各地にひろがっていったかが考察され、また文書にみえる言語と社会、国家構造の実相が明らかにされる。

ウルク期最末期（前3100頃）、メソポタミア最南部でシュメール人によって文字記録システムが発明され、これは初期王朝期（前2900-2350頃）にはシリア各地で採用される。シュメールに北接する地域にはアッカド人が居住したが、このアッカド地域を結節部として、イラク、シリアの各地に粘土板文字記録システムが普及する。そこで本研究では「シュメール文字文明」あるいは「粘土板文字文明」という概念を採用して、メソポタミア地域を中核とする文明の特質をあきらかにする。各地でほぼいっせいに成立した都市社会で、現地書記はシュメールと同一文字体を用い、シュメール語専門用語を駆使して、大公共組織の管理・運営を記録したのである。そのためにシュメール語彙リストが参照され、一部ではシュメール語対訳辞書さえ生まれる。

1. 本研究はウルク期末に成立し、ジェムデト・ナスル期に大発展するシュメール文字記録システム全体像の解明を目指す。2. 前2500-2350年頃にシュメール中・北部（ファラ、アブ・サラビク、ニップルなど）で成立した文書の研究を行う。3. ほぼ同時代のシリア各地（テル・ベイダル、マリ、エブラ）でファラやアブ・サラビク文書と酷似した粘土板が発見されている。これらを利用してそれぞれの地域の社会構造をあきらかにする。4. 前24世紀中葉にアッカド王朝が「シュメール文字文明」世界を政治的に統合する。そこで各地の文書を比較しつつ、王朝によって、どのように記録システムの統一化がはかられたかを研究する。5. アッカド王朝の崩壊後シュメール人の統一王朝（ウル第3王朝）が成立するが、南部メソポタミアにはセム系アムル人が大量に定住する。都市住民（シュメール人、アッカド人）とアムル人の相互交渉や都市民の牧民イデオロギーなどが研究対象となる。

本研究は他領域とふかく関わる。遊牧文化の研究領域では、セム民族（アッカド人、アムル人など）文化の形成過程、彼らのメソポタミア地域への移住・定着などが扱われるからである。また都市形成過程の研究領域では、シリアでの都市化が考察されるはずであるが、この地域では南部メソポタミアのウバイド、ウルク文化が到来したために、都市化が進展したはずである。そしてウルク文化がおよんだ地域がのち「シュメール文字文明」圏となり、アッカド王朝によって統合される。またこの文明圏では、都市域に接して牧

畜、狩猟世界がひろがり、都市はそれらの地域から多量の動物資源を手に入れているし、都市民の社会組織じたいも周辺地域と密接に関連していたはずである。それが「シュメール文字」テキストにどのように記録されているであろうか。

ここ20年シリア考古学が大発展をとげ、エブラ、テル・バイダル、マリで出土した前3千年紀粘土板の研究も進みつつあるが、この世界を統合する視点は不十分である。「シュメール文字文明」圏という発想は、「漢字文明」概念に触発されている。わが国の研究者は、諸民族がシュメール文字をどのように使いこなしたかをよく理解できるはずである。

計画研究

「パレスチナにおける都市の発達と セム系民族の文化的背景」

研究代表者 月本昭男（立教大学文学部教授）

本研究の目的はパレスチナにおける都市社会の発達と展開を明らかにすると共に、その中でセム系民族が果たした文化的役割を解明することにある。具体的には以下の二つの課題に取り組む。

(イ)パレスチナ北部、タボル山の南東約5kmに位置する古代遺跡テル・レヘシュ(古代エジプト文書や旧約聖書に言及されるアナハトと同定される)の調査研究。テル・レヘシュは都市が発達する初期青銅器時代から中期青銅器時代、後期青銅器時代を経て鉄器時代に至る各層が連続する未調査の遺跡である(地図ならびに遺蹟全貌写真参照)

テル・レヘシュ遺跡は初期青銅器時代から鉄器時代まで層位が連続している点において、パレスチナ北部・下ガリラヤ地方に類例を見ない。本研究では、テル・レヘシュの発掘調査に基づき、同一都市内における初期青銅器時代から鉄器時代に至るまでの物質文化の変遷を明らかにする。そのことを通して西アジア文化内における都市の普遍的な性格ならびにパレスチナ北部・下ガリラヤ地方における各時代の都市文化の地域的特質を解明する。とりわけ各時代層間の文化的連続と断絶に着目することにより、従来の考古学的時代区分を批判的に再検証する。

(ロ)旧約聖書の文献学的な研究ならびに考古・碑文資料(マリ文書、アマルナ文書等)の比較検討により、イスラエル民族の起源を探る。

イスラエル民族の起源については、一世紀余にわたる研究にもかかわらず定説がない。本研究では、碑文資料などから知られるセム諸部族の動向を明らかにすることにより、イスラエル民族の起源を歴史的に定位する。もともと、パレスチナにおいては、前2千年紀前半(前1800年頃)にシリア地方からセム系民族の移住があったと言われてきた。本研究により明らかになるパレスチナ北部の都市社会の展開は、ピシユリ山系におけるセム系部族社会の動向と連動しているかどうかという点において貴重な比較資料を提供するはずである。また、シリア・パレスチナ発信のアマルナ文書を分析し、後期青銅器時代におけるハビル等の動向を見極めることも重要な課題となる。

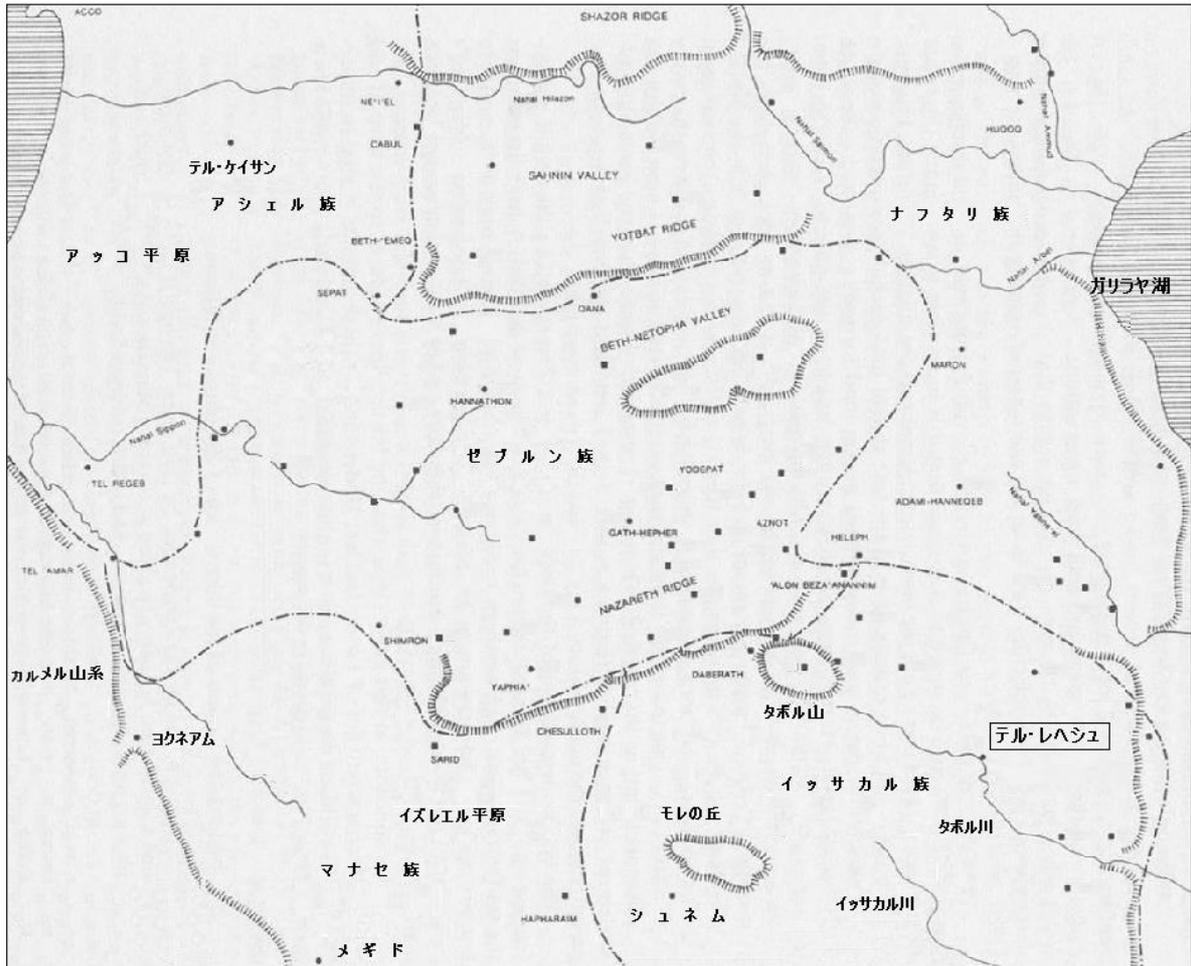
(ハ)本研究の学術的な特色ならびにその意義として、以下の三点が挙げられるだろう。

(1)初期青銅器時代から鉄器時代までの各層位が重なるテル・レヘシュの発掘調査により、同一都市内のほぼ2500年にわたる文化の変遷を跡付けることができるだけでなく、今まで同地域での大規模な発掘は一つも行われていないことから、この地域の物質文化の特質が解明される。

(2)上記の研究の結果、今まではなし得なかった他の地域との比較が可能になり、セム系民族の北パレスチナにおける動向が確認できる。

(3)後のユダヤ教、キリスト教、イスラム教に大きな影響を及ぼした古代イスラエル民族の起源を前2千年紀シリアにおけるセム系部族の動向の中に位置づけることができる。

なお、北部パレスチナ・下ガリラヤの諸遺跡に関しては、鉄器時代に限り、イスラエルの考古学者Zvi Galの領域調査に基づく研究が発表されているが（Lower Galilee during the Iron Age, Eisenbrauns, 1992）本格的な発掘は行われていない。その点において本研究は先行研究が概観したこの地域の文化に具体的かつ実証的な資料を加えることができる。また日本ではこの地域の考古学的な研究はなされていない。



下ガリラヤ地方における遺跡分布図



北西よりテル・レハシュ（アナハルト）遺跡を望む

計画研究

「環境地質学、環境化学、¹⁴C年代測定に もとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史」

研究代表者 星野光雄（名古屋大学大学院環境学研究科教授）

1 特定領域研究の発足にあたって

平成15年度に実施された企画調査を通じて、特定領域研究としての真に融合的な連携体制を整へ、平成17年度には、『「セム系」部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究』科研費申請へと臨んだ。幸い、大沼領域代表はじめ西アジア考古学関係者の努力により見事採択された。私も領域の一角を担う自然科学分析班としても大変喜ばしいことであり、一方では身の引き締まる思いである。領域研究の成果創出に向けての貢献はもとより、当班としての固有の研究課題にも積極的に取り組む所存である。

2 研究目的

当研究班は、シリア東部、ユーフラテス河中流域ビシュリ山系における自然環境の変遷を、環境地質学、環境化学ならびに¹⁴C年代測定にもとづいて解明することを目的としている。具体的な方法論は以下のとおりである。(1)地質・地形・土壌・植生を対象とした野外調査を行い、ビシュリ山系一帯の自然環境の実態を把握する。(2)領域全体の核となる遺跡発掘調査に参加し、地質断面等から過去の自然環境を解読する。(3)岩石・鉱物・土壌・胎土試料を地質学的、化学的、¹⁴C年代学的方法で分析し、自然環境変遷に関する実証的データを得る。これらの研究から創出された成果を総合的に検討して、地質時代から先史時代、「セム」系部族社会の形成を経て現在に至るビシュリ山系の自然環境変遷史を構築する。

3 研究の特色・独創性

ビシュリ山系を含めたアラビア半島北部の自然環境は、地質時代以来、地殻変動や地球規模での気候変動など様々な要因に支配されて変化を繰り返してきた。とくに、最終氷期以降のサバンナ気候ステップ気候・砂漠気候という乾燥化傾向は、先史時代から現代に至る人間社会に少なからぬ影響を与えたことは疑いない。自然環境に対する人間の営為が多面で問題となっている今日、自然と人間との関わりを通時的に明らかにすることは大変重要であると考えられる。この観点からも、ビシュリ山系で実施する本研究の学問的意義は大きい。研究代表者の星野は、これまでに7回のアフリカ現地調査を実施してきた。ケニア・ザンビア・スーダン・エチオピア・セイシェル諸島など東アフリカ全体の地質と自然環境に関する研究成果を基礎に、それらをより一層発展させた調査研究手法を本計画研究に適

用し、東アフリカ地域と地質学的・環境科学的に密接な成因的關係をもつアラビア半島、ビシュリ山系一帯の環境変遷史を解明する。分担者4名は、同位体環境化学、¹⁴C年代測定、環境保全科学および層序・古生物学それぞれの学術分野で既に十分な実績を有する研究者であり、また、全員が海外調査の経験をもつ第一線の環境科学者でもある。従来の環境変遷に関する研究の内容が野外調査と花粉分析主体であるのに対して、本研究は、採集試料の同位体化学分析と¹⁴C年代測定を加えたより精密な環境解析を目指した独創的な研究である。本計画研究を含めた13の計画研究は、ビシュリ山系を共通の調査核地域に持ち、研究期間5年間の大部分は実質的な共同研究として遂行される。現地での討論が研究の進展に計り知れない相乗効果を与えることは野外科学研究者が身をもって認識しているところである。自然環境科学は比較的新しい学問分野であり、このような体制の下で行われた自然環境変遷の研究は国内外を通じて皆無である。優れて先駆的な研究といえよう。

4 初年度の具体的な実施計画

(1) 現地調査

ビシュリ山系の概要を把握するため、地質・地形・植生等の自然環境に関する現地調査を、星野・田中・中村・吉田・東田の5名に加えて、研究協力者として大学院学生1名の参加により10日～20日間の日程で実施する。現地で岩石・鉱物、土壌試料などを採集するとともに、一次資料としての地質図・植生図・土地利用図などを作成する。また、領域共通の発掘遺跡の選定にも積極的に参加する。

(2) 室内実験

採集した試料の鉱物学的検討は主として星野・吉田、同位体化学分析は田中、¹⁴C年代測定は中村、花粉分析は東田がそれぞれ担当する。必要に応じて他の計画研究班が採集した試料の分析も行う。

5 おわりに

研究費においても学際的にも今回のような規模の西アジア考古学研究プロジェクトは、我が国では初めてのことと聞く。この特定領域研究への期待がそれだけ大きいということに他ならない。国際的に評価されうる成果創出を目指して、自然科学分析班として貢献したいと考える。

計画研究

「ユーフラテス河中流域とその周辺地域の 住民に見られる形質の時代的变化」

研究代表者 石田英実（滋賀県立大学人間看護学部教授）

西アジアは西でヨーロッパに接する地域であると同時に、南ではアフリカにもつながる。そのため先史時代からそれらの隣接地域から様々な影響を受けてきたが、独自性も強く、農耕・牧畜の始まりはこの地域がもっとも先進的であったし、国家や文明の形成においても同様である。このような世界を構築してきたのはどのような人々であったのか、またかれらの形質はどのようにして形成され、維持されてきたのか。このような観点からユーフラテス中流域を軸に西アジア人の時代的変容に迫ることが本研究班のテーマである。

これまで西アジアでおこなわれた自然人類学的研究を振り返ると、その開始は欧米の研究者による。しかし、第2次大戦後は日本人研究者も調査、研究に参加することとなった。その中で東京大学西アジア調査隊が先陣を切り、その後ネアンデルタール人骨の発掘を目指した東京大学隊、京都大学隊があり、より新しい時代の古人骨調査や研究は、筑波大学や国土館大学などの調査隊の中でおこなわれてきた。

本研究班の当面の課題は、藤井英夫を代表とする国土館大学隊が日本に持ち帰ったメソポタミア古人骨標本を中心として、欧米や西アジア各地に散在する古人骨標本のデータベース化と分析をおこないつつ、ユーフラテス河中流域のビシヨリ山系からの発掘される古人骨の分析に備えることである。

平成17年度の研究では、上記の国土館大学隊が持ち帰った古人骨標本について、X線CTスキャナーによるデジタルデータ化を開始する。同時に欧米、西アジアに保管されている西アジア由来の古人骨標本の調査を始める。合衆国においてはシカゴ大学、イェール大学、アメリカ自然史博物館、ヨーロッパにおいては大英博物館やパリの人類および自然史博物館をはじめとして、ドイツ、イタリア、スイスなどの博物館と大学に赴き、西アジア由来の古人骨標本の数量や保存状況を調査する。

国土館大学隊が日本へ持ち帰ったメソポタミア出土の古人骨標本は、この地域に関連するコレクションとしては世界最大級であり、その総数は数百体におよぶ。この標本の3次元デジタルデータからは、メソポタミア地域住民の形質に見られる時代的変遷の分析が可能となる。分析の視点は、生業、食性、それに成長をはじめとする住民の生活に関連する適応性と、イラク中部のハムリン盆地を中心とした地域集団の形成である。

今年度の成果として、第1に、古代メソポタミア人の咀嚼器官や骨成長の特徴、ハムリンの地域集団の形質特性についての概略を把握することであり、第2の海外での古人骨標本の調査からは、それらの量的、また質的な状況を知り、欧米研究者との議論から世界的に見た西アジア古人骨研究の現状をより深く捉えることである。

計画研究

「西アジア先史時代から都市文明社会への生産 基盤の変化に関する動物・植物考古学的研究」

研究代表者 本郷一美（京都大学霊長類研究所助手）

本研究の目的は、動物考古学と考古植物学の手法を用い、西アジアの先史時代社会から古代都市文明社会への移行過程における生業基盤の変化を明らかにすることである。研究代表者と分担者がそれぞれ遺跡出土の動物遺存体資料と植物遺存体資料の分析を担当する。

ユーフラテス河上流域で約1万2千年前に出現した定住集落において、植物の栽培化と偶蹄類の家畜化が進行した過程と、狩猟・採集から農耕・牧畜への生業の変化が社会の変化にどのように関与したかを探る。家畜飼育技術と植物栽培技術は生業基盤の両輪として密接に関連しながら発達したと考えられる。栽培化および家畜化の過程を進行させる重要な要因の1つは、定住集落が継続して営まれることにより周辺の環境が改変され、自然収奪的な生業形態がいきづまることにある。農耕と家畜飼育の拡大と技術の発達は、交易など地域的な交流や都市の成立による需要と関連していたはずである。牧畜・農耕が西アジア全域へ広がり、古代都市国家の成立基盤となっていく過程を、特に西アジアの古代都市国家の担い手であったセム系民族の原郷とされるビシュリ山系地域に注目し探る。また、セム系部族社会の成立には遊牧という生業形態とそれを可能にする乳加工技術の発達と密接な関連があったと考えられることから、乳利用の開始に関しても調査をすすめる。

平成17年度はビシュリ山系における調査にむけて、関連資料の収集などの準備を行う。研究代表者、分担者ともに、家畜と栽培植物の起源地の一つであるチグリス河・ユーフラテス河上流域および北西シリアの遺跡からこれまでの発掘調査により採集された資料の分析を行う。これと併行し、周辺の新石器時代遺跡の動植物遺存体資料のデータ収集を行う。動・植物遺存体の分析と記録は主に調査地で行う。

研究代表者はトルコ南東部のユーフラテスおよびチグリス上流域の新石器時代遺跡から出土した動物骨を分析し、家畜化の初期過程と家畜飼育の拡大過程の解明をすすめる。動物遺存体資料の分析においては出土する種の構成・死亡年齢・サイズ・形態に注目し、牧畜技術の発達に伴う変化を明らかにする。また、11月下旬にシリア北部のユーフラテス中流域における遺跡分布調査と来年度以降の調査地の選定に参加する。

研究分担者はシリア北西部の遺跡から出土した植物遺存体資料の分析研究を実施する。遺跡発掘現場でフローテーション法により採集された種子の形態と遺伝的な変化に注目し、生産性の高い品種が出現する時期と過程を解明する。西アジアの栽培植物は農耕開始から数千年間に急速に進化を

遂げ、古代都市国家が成立する時代には作物としてほぼ完成されていたことから、新石器時代にすでに極めて高度な栽培技術が存在していた可能性がある。植物遺存体の研究においては遺跡から出土する植物種子とこの地域に自生する野生植物の形態調査にもとづき、野生種と栽培種の利用を区別し、作物のコントロールの度合いという観点から農業技術の発達を明らかにする。また、研究連絡と比較植物標本の閲覧のためフランスのCNRS研究所を訪問する。

研究の実施に際しては自然環境、定住化過程、遊牧社会成立過程の各研究班との連携を密にし、農耕・牧畜技術の発達による生業基盤の変化および家畜・作物の交易の発達と社会の変化との関連を解明することをめざす。

計画研究

「古代西アジア建築における 組積技術の形態と系譜に関する研究」

研究代表者 岡田保良（国士舘大学イラク古代文化研究所教授）

本研究の出発点は、古代オリエント建築の歴史を、組積造を主とした建築の形態と技術の系譜として捉える点にある。組積造（あるいは組積構造）とは、建築大辞典（彰国社）を紐解くと「主体構造を石・煉瓦・コンクリートブロックなどの塊状の材料を積上げて造った構造。耐震性に乏しい…」とあり、「積固め式構造」という別称を挙げる。世界中の建築文化を大づかみに比較するとき、材料の観点から、木、石、土の3種に大別するとわかりやすいが、土の文化圏では、土を建築につくり上げる工程で、日乾にしる焼成にしる、煉瓦という中間形態を用いることが多い。その結果、石の建築も煉瓦積みという土の建築も、圧縮力には強いが曲げや引っ張りに弱いという同様の構造特性をもつことになる。組積造として括られる所以である。

イラン西部から地中海東沿岸に至るオリエント地域は、この組積造の建築文化を基層にもつが、そこに現れる諸々の建築形態や組積技術はじつに多様である。が、同時に地域固有の伝統が存在することも明らかだ。その多様さと伝統を担い、それを子々孫々伝えてゆくミニマムがおそらく部族という社会単位ではないかと考えている。組積造では壁を造ることは容易だが、扉や窓という開口部を設けたり、部屋や通路を覆うには工夫が必要だ。ドームやヴォールトといった頭上に架かる曲面構造はそうした英知の結晶であり、地域や集団の技術的伝統がうまく反映する。

ここではティグリス・ユーフラテス流域のメソポタミア低地部とその周辺地域というふうに、オリエントをその中核部に限定し、当地に建築文化が根付く初期文明期から新バビロニア帝国がペルシアによって解体される紀元前6世紀頃までの古代を中心に、それ以前の先史期、それ以後イスラームが勃興するまでを古代後期とし、比較対照を試みる。そうした歴史的枠組みの中で以下の仮説を立て、過去の調査成果と実地踏査に基づきつつ建築資材の調達から仕上げ施工までを想定し、仮説の検証を行う。とくにドームやヴォールトの架構は、遺構の観察上最も注目する点である。

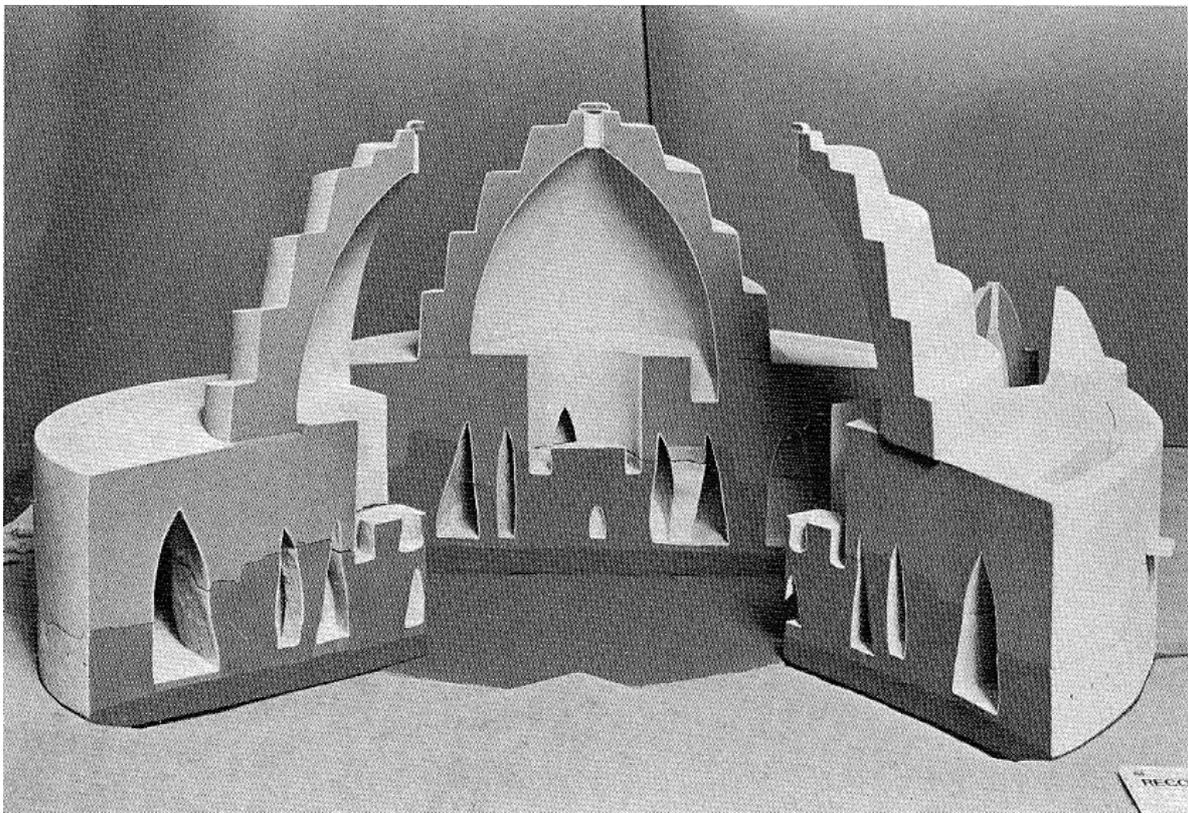
仮説1) 古代前期について、セム系部族社会が広く優位に立ち、周辺に対するメソポタミア建築の独自性と先進性が確立すること、及び周辺3地域、つまり東方ザグロス山麓地方、北方ティグリス・ユーフラテス最上流域、そして西方ビシュリ山系を核とするユーフラテス中流域それぞれの建築造形技術が、顕著なローカリティを示す。

仮説2) 古代後期は、セム系部族社会を技術的背景としていた建築文化が、かつて外縁地域にあったより大きなギリシア系、イラン系民族集団の流動と相互交渉が繰り返されることによって一時的に混乱するが、イスラームの到来に伴って、新たな造形を獲得しつつ再び優位性を取り

戻すまでの過渡期とみなしうる。

本研究の特色は、比較の手法を組積構法の観察対比に適用し、東西に隣接する諸地域との影響関係、前後に連続する時代にまたがる建築系譜の変遷過程を明らかにすることにある。古代オリエント建築を、このように地域性と時間軸とを総合して技術的系譜として捉える研究はいまだ見ない。

もとなつた契機は、テル・グッバの復原研究にさかのぼる。そこでは日乾煉瓦、円形、ドームといったキーワードがリンクしあふ。比較の対象はハラフ期のトロスや、イランのチャハル・タークにまで及んだ。以後今日に至るまで、数多くの遺跡や歴史的建築と接するなかで、石積み、煉瓦積みの多様さ、巧みさを見せつけられてきた。この特定領域研究という一つの輪に集う方々の刺激を大いに期待し、そうした人類の英知に対し系統立てて理解が及ぶようになれば幸いと、胸を膨らませているところである。



解説文:テル・グッバ第Ⅶ層中心部遺構の復原想定模型断面

計画研究

「西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究 衛星画像解析による探査法」

研究代表者 松本 健（国土舘大学教授）

西アジアにおける遺跡の調査は19世紀の中頃から主として欧米の探検家・考古学者・碑文学者・建築史学者などによって進められてきた。日本も1956年以降、年々数多くの調査団が派遣されるようになり、近年では年間10の調査団が派遣されている。

メソポタミアの一部では中心的な遺跡を発掘調査しながら、周辺の遺跡の分布調査をも進め、交易路や文化拡散の研究が進められているところもある。しかしながら発掘調査も代表的な遺跡の一部に留まり、西アジア全土に分布する遺跡の全体を把握するに至っていない。国土舘大学は1970年以降、イラクの西南砂漠遺跡群、ハムリン盆地遺跡群、ハディーサ遺跡群、エスキ・モースル遺跡群を発掘調査してきた。そして古代都市キシュの発掘調査は、1989年以降実施している。またイラクを含め各国が調査団を派遣して、メソポタミア文明解明の探求を日々進めている。今日、宗教的、民族的対立が表面化している中で、さらに中東研究が注目されている。

しかしながらイラクは政治的に不安定で、紛争や戦争が絶えず、発掘調査は中断したままである。その間にも貴重な文化遺産が今も破壊・略奪され、日常的に盗掘も各地で行われている。こうした厳しい現状の中では、遺跡の破壊や盗掘を防ぎながら、調査研究を進めていくということが重要課題である。それにはまず遺跡の警備を強化することであり、具体的にはパトロール隊を創設して遺跡や歴史建造物を管理、警備することである。同時に遺跡や歴史建造物、無形文化遺産などの調査を進め、まずそれらのデータベースを作成することが求められる。このような文化遺産のデータベースを作成することがすなわち文化遺産を保護することであり、その国のアイデンティティを確立することであり、それが研究や教育の基本となる。

しかしながら治安の悪いことや、人材、経費などの問題から、意図するような文化遺産の分布調査が現地ですら十分にできないのが現実である。そこでイラク戦争後に衛星画像や詳細な地図が公開されるようになってきたことを活かし、また今までの我々の30年以上に渡るイラクでの調査実績を合わせて、衛星画像から遺跡の状況を分析し、そのパターン遺跡の認定また性質が推定できる研究を行う。また現地イラクの研究者のネットワークによって遺跡や歴史建造物の確認を並行して進めていく。その地域はセム系アッカド人のキシュ、アモル人のバビロン、アッシリア人のモースル地域、アラブ人のバグダッド、そしてセム族源郷のビシュリ山系地域を中心とした文化遺産の研究である。加えてその衛星画像解析を取り入れたデータベースを文化遺産の管理及び保護に役立てる。

- 1.メソポタミアですでに調査されて、登録されている遺跡を衛星画像によって解析を行い、それから得られた情報から遺跡のパターン化することを試みる。同時に文献を含む参考資料をもデータベース

に入力する。

衛星画像の入手単位が121 範囲であることから、地理的、文化的、歴史的に特徴的な(1)中南部イラクバビロン・キシュ遺跡周辺(セム系アッカド文化圏)、(2)南イラクのウルク遺跡周辺(シュメール文化圏)、(3)中部イラクのバグダッド周辺(イスラムアッバス朝及び現在の首都)、(4)北部イラクのモースル地域(アッシリア文化圏)、(5)上記の文化圏の文化遺跡の画像分析を活かして、また他の分野のシリアのセム系源郷ビシュリ山付近の分布調査を活かして、この地域の特徴的な遺跡群の、位置、範囲、形、色、高さ、植生、堆積物やその状況などから解析し、パターン化を試みたい。

2. イラクの場合は入国が困難なところからイラク考古遺産庁研究所とのネットワークによって、実際にイラクの考古学者が現地へ赴き、遺跡の有無やその状況、遺跡名、時代など確認しながらデータベース化を進めていく。
3. イラク以外の西アジア各国に赴いて特徴的な環境、地域、遺跡を実見し、人々の住む都市、集落のパターン化、遺跡のパターン化を進め、同時に他分野の研究成果と合わせてメソポタミアの遺跡のデータベース化を確実にする。またその成果を活かして、より詳細な解析をさらに進め、またイラクのみならず西アジア各国の遺跡データベース化を進めていく。

計画研究

「オアシス都市パルミラにおける ビシュリ山系セム系部族文化の基層構造と再編」

研究代表者 宮下佐江子（古代オリエント博物館研究部研究員）

本研究は、紀元後1-3世紀のオアシス都市パルミラの基層構造であるそれまでのセム系社会の文化が地中海世界や東方文化と出会うことによって、どのように変容したかあるいは再編していったかを明らかにしようとするものである。

パルミラは紀元前1800年頃のマリ文書にその古代名タドモールを記しているように、ビシュリ山系の地であって、永くセム系社会の一員としてその歴史を育んできたが、ヘレニズム以降においてはその様相を大きく転換するにいたった。

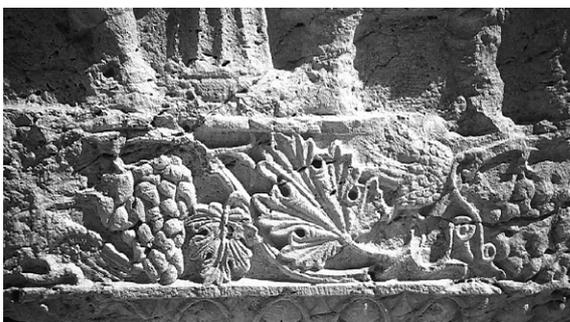
すなわち、アレクサンダーによる西アジア侵攻に伴って、多数のギリシア人が移住し、このシリア砂漠のオアシスも「タドモール」という名前からナツメヤシの町を意味するギリシア風の「パルミラ」に変わった。

そして、その地理的特性と豊富な水資源を生かして、盛んになりつつあった東西交渉の要の都市へと発展したのだ。東西に行き交う隊商への物資の調達、出入りの商品への関税、隊商の護衛隊組織の設立などによって生み出された富は町の公共建築の整備や裕福な階層の豪華な墓の建造をもたらした。漢代の絹製品が塔墓から出土しているが、流入する商品は広範囲におよび、それらが都市形成の段階で影響を及ぼしていることも推測される。

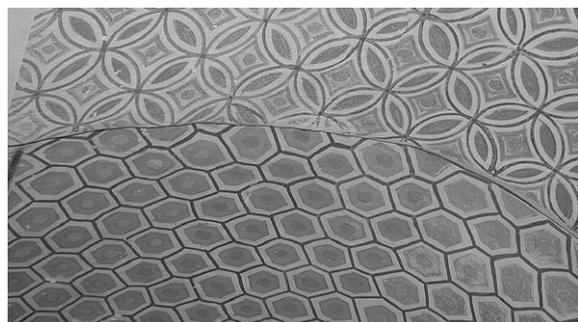
これらをふまえて、周辺の同時代遺跡との比較研究をおこないながら、その時代に出現したパルミラ美術における地中海的性格、あるいは東方的様相を読み解き、それらと基層文化の交感がいかなる展開をみせたかを探ろうとするものである。

これまではパルミラ美術作品に関する研究は主に地中海世界との関連について言及されてきた。しかし、本研究はビシュリ山系のパルミラという観点から基層構造であるセム系社会の文化の反映を明らかにしようとするものであり、さらに東方への影響ではなく、東方からの影響をも探ろうとする点において、従来とは全く異なる視点による研究である。このような研究方法によってパルミラ美術はいわゆる西洋的位置づけではない、新しい視座を獲得できるだろう。

それは現代における中東=イスラームという一般的理解に疑念と斬新な解答を提示できるものでもあろう。



ベル神殿の長押の葡萄唐草文



パルミラ西北墓域「三兄弟の墓」天井画

これからの予定

2005年10月8日 土 午後5時

計画研究班「西アジアの旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係」(研究代表者 佐藤宏之)の会議

2005年10月16日 日 午後1時

第2回総括班会議、第2回研究代表者会議

議題:大沼克彦領域代表者から9月シリア考古総局との折衝に関する報告

11月シリア現地調査方針、事務手続き

計画研究代表者、および11月現地調査参加者は極力ご参集下さい。

2005年11月後半

総括班、計画研究班合同による現地遺跡の分布調査

2005年12月前半(2日連続して開催)

平成17年度第1回定例研究会

議題:現地遺跡分布調査の成果発表

国内研究成果発表 前川和也「マルトゥーの結婚」他

第3回総括班会議、第3回研究代表者会議

Newsletter 「セム系部族社会の形成」No.1 2005年9月30日発行

発行: 文部省科学研究費補助金「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
代表 大沼克彦

編集:大沼克彦 藤井純夫 西秋良宏 常木 晃 佐藤宏之 宮下佐江子
事務局:〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1国士舘大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室
Tel: 042-736-5489 Fax: 042-736-5482 E-mail: kaonuma@kokushikan.ac.jp
ホームページ: <http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html>

